万国博と国際女医会総会

会長　三神美和

長い冬も漸く終り、花の季節となりました。

わが日本女医会でも、この二年間つみ重ねて貯えられたエネルギーがいよいよ花ひらき、三月十五日から万国博医療サービスが開始されました。

また二月十二日には国際女医会総会へ出席のため五十名がオーストラリアに出発し、無事成果をおさめて帰国しました。更に五月には社団法人としての第一回総会が開かれる運びとなっております。まことに一九七〇年は年明けとともに本会の活躍の年となったのであります。このように活躍できますことは、ひとえに会員の皆様のご協力と団結の賜物と存じまして、ただ感謝の気持で一ぱいであります。

そこでまず万国博医療サービスについて申し上げたいと存じます。

三月十五日に始まった万国博は毎日押すな押すなの盛況でありますので、それだけに救急所を訪れる患者の数は多く、毎日六〇〇名に上っております。三月中は万国博そのものに運営上の不手際が目立ちましたが、四月に入ってからは非常にスムーズになって来たようであります。私たちの医療サービスも万国博と同様に三月中は色々と不備な点があり、診療に従事された方々に不快な思いをおさせしたと思いますが、四月に入ってからは万事円滑に行くようになりまして、ホッと胸をなでおろしております。開店早々には万事不慣れで軌道にのるまでは大変だということをしみじみ痛感しました。準備のため三月十二日に事務の小川さんと藤本理事が宿舎になっている千里の公団マンションに行かれた時は、全くひどいもので、電燈もない状態でした。お二人が東京から運んだ食器類（理事の方々のご寄附によるもの）や現地で買い求めた台所道具などを整理し、とにかく住めるようにしてくださいましたが、私が十四日久保田理事と一緒に宿舎に参りました時も、寒さとひもじさでつらい思いをしたものであります。十五日から始まる診療のため来られた若い会員の方々とコタツに手足を突込んで、藤本理事が自動車で買い集められた食料を分ちあって体をあたためたのでした。宿舎から店は遠く離れ、とても不便ですので、医療奉仕の方々の朝食は、やはり万国博地域にある給食センターでとって頂くのが最もよい方法だということを再認識しました。次に心を痛めたのは、朝出勤時の交通の点でした。万博協会から廻して頂くことになっていたマイクロバスが開始直前になってことわられたのです。桃山台駅までは徒歩で二十五分を要しますので、どうしても車を欲しいと思い、八方手をつくして漸く阪急タクシーに毎朝電話で連絡して、来て貰うことになりました。これも時々途切れるということで会員の皆様にご迷惑をおかけしましたため、三月二十一日から二十五日まで上田理事が車と運転手を提供してくだされ、またそのあと、村木先生も応援してくださいました。また武田製薬が確実に阪急タクシーを確保してくださいました。しかし三月三十日に私が再び万博協会に参りまして、交通についてお願いしましたところ、マイクロバスを朝七時十分に廻してくださることを快諾下さいまして、ようやくのことで朝の交通問題は解決しました。そこで目下は七時十五分に宿舎を出発してバスで約十分で給食センターにつき、ここで朝食をすませ、そこから徒歩三分で中央診療所の事務所へゆき、ここで入場証をうけとり、そこから各自の持場の救急所へ徒歩五分から十五分でつきます。診療は九時から四時まで従事して頂いております。場内救急所は女医一名、看護婦一名が必らず常勤することがたてまえで、診療はあくまで日本女医会が責任を持たねばなりませんので、勤務時間中はたとえ手のあく時がありましても万博場内の見物はなさらないようにして頂きたいと思います。また救急所はあくまで救急的なものを取扱う所でありますので、少し手のかかるものは中央診療所に送るように致します。奉仕された会員の意見によって、万国博診療部もより適切な改善をしてくださるようであります。万博協会も日本女医会の毎日の診療奉仕に対して感謝しておられます。全国会員の皆様のご協力によって絶え間なく救急医療サービスが行なわれているということは何と有難いことでありましょう。ただ感謝あるのみであります。

次に第十二回国際女医会総会について申し上げたいと存じます。会議の内容についてはほかの担当者から報告がありますので、私は参加者の一人としての感想とそのあらすじを報告させて頂きます。一行は五十名、二月十二日の夕刻五時に羽田空港を出発しました。それにさきだちその前日は盛大な壮行会をおひらきくだされ、また出発当日は大勢の方々がお見送りくださって、会から一行に記念として蘭の造花をお贈りくださいました。数々のご好意に対し一同にかわり心からお礼申し上げます。

さて一行は香港からダーウィン、シドニーを経て十三日夕刻メルボルンに到着しました。時差四時間を加えますと相当の飛行時間となりますが、一同元気に南十字星の名をそのままのサウザンクロスホテルに旅装を解いたのであります。南半球は夏であり、夏は暑いということが常識でありますが、メルボルンは思ったより涼しく、時には秋の終りを思わせる涼しさでした。学会は十四日登録で十六日から討議が行なわれたのであります。十四日、一行は首都キャンベラを見学しました。第二次大戦の緒戦にシドニー湾に身をとして潜入した日本の特殊潜行艇が記念として陳列してある有様に深く感動し、ワシントンに似た落ついた町並を羨やましく眺め、夕方メルボルンに帰って参りました。その夜外科講堂で開会式が行なわれ、市長、医師会長など長い祝辞がありましたが、一同空腹を抱えてホテルに戻るというつらい会でした。

十五日は日曜でしたが、その夜、日豪協会の方々のご好意により、二人三人の小グループに分かれて協会員の家庭に招待されました。このことは渡豪前から問い合せがあって、佐野あや先生は心を砕いておられましたが、結果的には、一行の人たちが大変歓待され、日豪親善を深めたことになりました。佐野先生のお骨折の甲斐がありまして、本当によかったと思います。十

六日からいよいよ討議が行なわれました。静かな環境にある国立科学センターの建物は会議の場にふさわしい所でした。開会早々小野春生先生が議長となり討議が進められました。またその日、日本からの演題「婦人労働者の職業病」が出題者石津澄子女史に代り佐野先生から報告されました。小野先生の議長ぶりは滑達自在というべくまことに巧みなものであり、佐野先生の報告も明瞭なスライドをまじえ、判りやすく一同に感銘を与えました。

さながら日本デーともいうべきこの日に出席者一同満足し胸ふくらむ思いでした。その夜八時から国際女医会五十周年記念式典が「イサベル、ヤンガー、ロス、ホテル」で開かれました。美しく着飾った各国会員で会場は埋まり、華やかな雰囲気でした。会長の挨拶のあと壇上で五十年の歴史が述べられました。今から五十年前アメリカのニューヨークで、アメリカ女医会指導のもとに発会されて以来、加盟された国々を加盟順によみ上げ、その都度その国の連絡書記が国旗を持って壇上に登場し加盟記念証書を受けとって行きました。なかなか見ごたえのある演出で感激しました。日本は一九二二年に加盟し、五番目でした。現在三十か国以上を数える加盟国の中で日本がいち早く五番目の加盟国であるということと、加盟後すでに四八年も経過しているということに一同感動しました。今更ながら吉岡弥生先生の国際感覚の広さ、鋭さに感嘆させられるのであります。あとにつづく私たちもこの先生の大志をうけついで活躍しなければならないと思います。十七日は討議、十八日は会主催の観光、日帰り旅行でありました。私たち一行は出発前から計画された旅行に出かけました。一組は大陸の中央「アリス、スプリング」へ、他の一組は南の島タスマニア島へ出かけ、前者は原始のオーストラリアの姿に接し、後者はその昔囚人が送られたあとを偲び、風光の美しさに英気を養いました。人口の過密と都市の工業化のため自然を害されている日本とは凡そ程遠い存在であるオーストラリアは私たちを本来の人間にひき戻す場所であったようです。大都会メルボルンでもホテルから一歩外に出れば、緑の溢れた公園が至る所にありますし、郊外に出れば膨漠たる平野であります。この土地の一角でも日本に持って行けたらなあと一行の口々から洩れたのも宜なるかなでありました。

さて話が長くなりましたので最後の閉会式後の晩餐会に移りましょう。場所は「ビクトリア、アート、センター」の中の大ホールでありました。

さすがに立派なホールで、ステンドグラスを張りめぐらした天井と輝やくシャンデリアのもとで一同夢心地でありました。集る参会者五百名を十二名づつのテーブルに組分けられ、テーブルごとに各国の人たちが入り混り国際色豊かな宴会でした。日本女医会の方々も片言の英語、時には独乙語が飛び出すなどで、結構国際親善の実をあげたようで、帰りのバスの中はこのお話で持ち切りでした。最後の晩餐会のご馳走だけは十分満腹できて、オーストラリア料理を味わったという満足感がありました。

以上で学会は終り、一行はそれからニュージランドに行き、その後一組は帰国の途につき、一組は更に東南アジアにわかれたのでありますが、これらの旅行記はまた追って誌上にのせられることと思います。

第十二回国際女医会総会を顧みまして、やはり出席してよかったと思う方が多かったと思います。各国女医との親善、また日本女医会員相互の親睦、これらは得難い収穫でありました。また日本女医会としても、小野先生の副会長再任、講演会の成功など大いに面目を施し得たと思います。次に開催国に日本が立候補しなかったので、その理由を小野先生がひどくきかれたようですが、とてもまだ無理と思われます。と申しますのは総会はとても資金を要しますのでこの面で、も少しお金のかからないように工夫する必要のあること、また一九七四年までにこちらの態勢がとても受け入れられないことなどであります。しかし一九七六年にはそろそろ日本が会場を引き受けなければならないのではないかというのが、小野先生はじめ今度出席された会員たちの考え方であります。

その頃には、立派に英語をマスターできる若い会員もふえて参りますし、資金面でも今から計画的に工夫すれば不可能ではないと考えます。第十二回総会ではオーストラリアは、全土の女医が一丸となって活動したということであります。万国博医療に示した日本の女医の力、会員のご協力を拝見して私は一九七六年に日本が国際女医会総会会場を引き受けてもきっとやってゆけると確信しております。

皆様!!　どうぞ日本女医会の実力を国際女医会に対し、お示し下さいますようお願い致します。

五月十日日本女医会は社団法人として第一回総会を開催致します。丁度万国博医療サービスの最中でありますので、定期総会としてなさねばならない事業報告、予算、決算の審議と、更に定款細則の一部の審議、および吉岡弥生賞の授賞のみを行なうことに致しました。ご承知のように今年は役員改選の年でありますが、それは万国博が終ってから臨時総会を開いて行ないたいと思います。定款の細則はこの役員改選に間に合うように、とりあえず役員選挙の項についてのみ審議して頂くことにしました。

吉岡弥生賞は本年二月七日に審査委員会を開き、学問的に立派なお仕事をなされた三名の会員にお贈りすることになりました。（次号に記載）

この方々は長い間研究一途に専念され、立派な業績をあげられたのでありまして、すでに専門学会、その他から表彰されて居られます。このようなすぐれた会員を持つことは、日本女医会にとってまことに喜こばしいことであり、誇らしいことであります。今後もひきつづき、このような立派な受賞者の続出されますよう希っております。

本年六月に第五回アジア婦人会議の総会が日本で開かれることになり、日本女医会にその協賛を求めて来られましたので、その代表に山崎倫子女史、臼井潔子女史、小野春生女史の三名を推薦しました。

本年は日本女医会が広く社会に向ってつき進んでゆく年であるように思います。才能のある方はその才能を生かし、医者として、社会人として十分にご活躍頂けますよう心から願っております。

第十二回国際女医会総会及び理事会報告

国際女医会副会長　小野春生
日本女医会国際連絡書記　佐野アヤ子

二月十四日よりメルボルンで開催された第十二回国際女医会総会へ日本女医会からは三神美和会長はじめ四十七名が参加いたしました。出席された会員は、三神会長、二瓶礼子、鈴木英子、佐野アヤ子、落合ハナコ、大原一枝、

前川勢津、松村鉄子、宮崎悦子、岸直枝、高間美さ保、若木しづ、高橋けい、政川ゆき、明石寿美子、二見とめ、犬飼美代、作田静子、及川富美子、小出つる子、中田美奈子、松家雪枝、遠藤ハナ、柳瀬路子、横山　貞、佐藤千代子、森川みどり、荒川あや、三輪輝子、平形京子、長山トシ、卜部美津子、滝口寿満子、山本美代子、野村多賀子、古川恵美子、出田艶子、岩崎てる子、平出ふさ江、藤原幸子、阿部秀世、上条正子、山崎敏子、山口タカ子、渡辺文子、松岡和子、小野春生とその他同伴者二名で総勢四九名です。

総会のテーマは〝産業にたずさわる婦人の健康〟でございました。二十余年前と比べて現在は働く婦人の年令層が上昇している国が多く、又昔は独身、未亡人、離婚婦人又は働かなければ経済的に生活できない層の婦人が産業にたずさわっておりましたが、昨今は勿論収入を得るためとはいえ、その理由がレジャー、電気器具、新車、特に米国では二台目の自動車の購入等のためでございます。一方自分の能力を家庭の中だけでなく、社会に出て働きたい婦人が多くなったようです。共通した問題の一つは働らく婦人の子供を誰が面倒をみるかが文明国の婦人のなやみでございます。

保育所の不足はどこの国でも訴えております。その結果学令児童のいる家庭では子供が学校から帰り、父親が職場から帰ってきてから働きに出るいわゆる準夜勤務を望む婦人が多くなったとのことでございます。働く婦人の役割は多く、職業のほかに母親として、主婦として料理、掃除、洗濯、その他の雑用のため、慢性疲労におちいります。その結果夜は寝つきが悪いため睡眠剤を服用し、朝になると覚醒剤をのんで無理に働く、即ち自分の肉体に鞭打って働いているために、慢性疲労が蓄積悪化している婦人が多いと数か国より報告がございました。又いそがしいため食事内容が片よったり、又は、若い人はやせるため食事制限を医師の指示なく勝手にするので貧血になっている婦人が文明国にも多いと申しておりました。

講演を終えて……（左）小野氏（右）佐野氏

ノイローゼも問題の一つです。

職場の医師は簡単に安直に精神安定剤を処方せずに、まず訴えを丁寧に充分に聞いてあげる方が治療になるとの報告がありました。日本女医会の石津澄子先生の婦人労働者の職業病と題する講演（別載）を国際連絡書記の佐野が代読し、きれいなスライドを用意して説明しました。昨年は国際女医会が創立されて五十年目にあたりましたので、この度華やかな記念式典がございました。

各国より基金が集められましたが、日本女医会から二百ドル（うち百ドルは今回参加された方々より集めて差しあげました。）

今回会議の決議といたしまして、働く婦人の労働条件を改善させるために

㈠　婦人の体格及び体力にあわせた機械をそなえるよう心がけてもらうこと。

㈡　働く婦人が束縛された無理なきゅうくつな体位、即ち不自然な筋運動をしないですむよう職場の施設設備を構成してもらうこと。

㈢　休息及び体操ができるような時間割を作ってもらうこと。

以上をジュネーブの国際労働局に国際女医会本部より要望することを決議しました。又各国の状況に応じて異なりますが、各国の女医会が必要と認めたら決議事項を自国の関係する機関に要望することに致しました。

なお家族計画のインフオメーションが手に入るよう、又各国の労働力が経済力に直接関係する折から、婦人がやむを得ず就職した際の再教育を可能にすることなどでございました。

理事会では次回の昭和四十七年の第十三回国際女医会はパリーで九月の第二週頃に「トキソプラスモージス」のテーマで、世界的に有名な学者が講演することにきまりました。

次の第十四回国際女医会（昭和四十九年七月頃）はブラジルのリオで開催され、テーマは「健康に影響する遺伝及び環境」ときまりました。

選挙の結果、会長は、ヘルステット（スエーデン）、次期会長モラニー（米国）、会計長クロス（英国）、書記長キユリ（オーストラリヤ）、副会長は北欧地区テルパィニン（フインランド）、中欧地区ティエーメ（独）、南欧地区ファイヨ、ペティメール（仏）、北米地区ニーマー（米）、南米地区ストルツ（ブラジル）、近東及びアフリカ地区ピルニア（イラン）、中部アジア地区ダルマバーニ（タイ）及び西部大平洋地区は小野が選ばれました。私も日本女医会員としておよばずながら二年間させていただく決意です。どうか会員の先生にはひきつづきご指導、ご援助下さいますようお願い申し上げます。

以上簡単に総会及び理事会のご報告を申し上げました。

婦人労働者の職業病

東京女子医大衛生学教室
石　津　澄　子

一九六七年現在の統計によると、一五歳以上の婦人の人口は三、八九二万人、この中、労働人口は一、九八八万人で、労働率としてみると約五一％に相当する。

又、産業別分布をみると、農林業従事者が最も多く全体の二九・七％に相当している。他方雇用者についてみると一九六八年一一月現在の実情は表1の如く製造業に雇用されているものが多く三四で％、次いでサービス業、卸小売業となっており、この三種の業種で九〇％近くを占めている。つまり雇用婦人の労働力は上記の三業種に大きく分散されているといえる。

この中で最も就業者の多い製造業の内容をみると、繊維産業、衣服製造業、電気器具製造業に婦人労働者が多いという。この種の工場の作業内容が軽作業で、且単純なくり返し作業であるため、婦人の適正作業とみなされたからである。

これら婦人労働者の年令構成をみると、表2の如く、ここ五年間に二〇歳未満の若年労働力は逐年的に減少し、四〇歳以上の中高年令者が増加してきており、特に五五歳以上の婦人の労働人口が増加しているのは、かつての日本の労働界では決して見出されなかった現象である。この理由はいろいろ考えられるが、現在の日本では男子は勿論女子も高校又は大学への進学率が高く、子弟の数が年々減少していることと相まって、二〇歳以下の若年労働力が減少し、好むと好まざるとにかかわらず、高年令者を雇用せざるを得なくなっているのが大きな理由である。

又、婦人労働者の質的内容をみると若年層においても既婚者がふえつつあり、有夫有子の婦人が増加しつつあるのが特徴である。既婚婦人が職場に増

加してきたのも一五～一六年前の日本の産業界ではみられなかった現象である。

このような実情下にあって、労働婦人の健康はどのような状態であるかといえば、勿論、結核、その他伝染病など公衆衛生上の問題となる疾病はほとんど皆無であるが、反面、労働によっておこる生理機能の障害、つまり職業病のような新しい健康障害が散発している。

ただし、かつて、日本の労働婦人にみられたような悲惨な犠牲的な患者はみられず、（女工哀史的なもの）むしろ、より文明病的な傾向をもつ疾病がみられることが多い。この傾向は女子のみではなく、男子にもみられるので現在の日本の一般的な職業病の傾向といえるであろう。

とにかく、ここ一五～一六年間に産業でおこった主な婦人の職業病を一らんしてみると、表3のようなものである。家庭内職主婦に集団的に発生したサンダル底張り作業によるベンゼン中毒は大きな社会問題となったが、この種の災害性の中毒事件は最近ではほとんど発生していない。

現在は、事務作業の機械化の普及で、I・B・M（International Business Machine.）をはじめ、各種の計算機操作による局部的疲労がこうじたと思われる手指障害の発生がトピックとなっている。しかし、この種の職業病は明らかな疾病としては具現せず、一種の「局部的疲労」から派生した神経症的な心理的不安として把握されることが多い。

更に、若年労働力の不足から農山村婦女子をかりあつめて集団就職させることが流行しており、刺戟の多い都会生活をいきなり強要された若年女子の間に集団ノイローゼのような神経障害が発生したこともあった。

なお、現在の日本では労働基準法の施行で婦人は有害業務への就業を禁止されているが、一部の中小企業、零細企業では労働力の不足のため、危険物を取扱う作業でもそれが軽作業や単純なくり返し作業であれば婦人を雇用し、就業させていることがあり、そのために鉛中毒や接着剤による「かぶれ」などが発生することがある。

これらの例をスライドによって解説する。

（国際女医会にて発表）

表1　女子の産業別就業者数

（1968.11 現在）

産業の種類	人員	その割合
就業者総数	2,003万人	
自家営業主	303	
家族従業者	668	
雇用者	1,031	100%
農林業	12	1.2%
漁業，水産，養殖業	2	0.2
鉱業	3	0.3
建設業	52	5.0
製造業*	350	34.0
卸小売	237	23.0
金融保険，不動産業	50	4.8
運輸通信	42	4.1
電気，ガス，水道業	3	0.3
サービス業	254	24.6
公務	26	2.5
完全失業者	16	

* 製造業の中では繊維工業，衣服製造，電気器具製造が多い。

表2　年令別婦人労働力率の推移　（%）

年	15～19歳	20～24歳	25～29歳	30～39歳	40～54歳	55～64歳	65歳以上
1963	41.9	71.9	50.7	56.0	59.6	44.8	21.9
1964	37.4	70.7	49.4	55.7	59.6	45.5	22.3
1965	35.8	70.2	49.0	55.3	60.2	45.3	21.6
1966	38.0	70.1	48.7	54.7	61.5	45.7	21.7
1967	38.4	70.0	49.0	54.6	61.7	46.1	21.4

1967 年　総理府統計局……労働力調査

表3　最近の女子の職業病

企業の種類	職業病の種類
サンダル等の履物製造	ベンゼンなど有機溶剤中毒
電気器具製造	部品の接着に使われる，エポキシ樹脂皮ふ炎
ダイナマイト製造	不凍ダイナマイトに含まれるニトログリコール中毒
カメラ，光学機械製造	金属部品のクロムメッキによる皮ふ炎
事務機械作業	カードにパンチする作業による手指障害（キーパンチャー）
サンマースエター製造	油おとしに使うトリクロルエチレンによる中毒

この外，中小企業では鉛，有機溶剤などの中毒になっている例も多い。

万博の救急医療に参加して

笠井　和

いよいよ万博が始まり、日本女医会の役務提供についても割当の日がきまった。第一陣は主として東京女子医大の学内の者で、私は三月二十・二十一日、火曜広場である。

二十日朝、八時少し前に万博中央口駅に到着し、アルバイト学生である駅員さんに中央診療所まで案内して頂き、そこで通行証を貰って、二日間の職場である応急手当所にむかった。開場時間には間があるので、行きあう人は皆職員なので、「お早うございます」「ご苦労さん」と動く歩道の上もさっさと歩いてそれぞれの部所に急いでいる。和らいだ、しかも緊張した気持で、写真をとったりしながら歩く。少し肌寒く、昨日の雪もうっすらと残っているが、空は青く晴れて、色とりどり様々な形のパビリオンが美しい。

看護婦さんもボランティアで、二十日伊野さん。二十一日三村さん、共に大阪の小児保健センターに勤務している。お互に小児科なので、あまりひどい外科的な病気や、老人病などは困ると話しながら、消毒をしたり、備品を点検したりして待機する。

火曜広場の手当所の利用者は二十日十四名、二十一日四十名で、他の手当所に比べると、少なかったようであった。大部分の患者はころんだ擦過傷、長途の乗物づかれからの脳貧血で、風邪、頭痛、腹痛も少しあった。人気のあるアメリカ館やソ連館に少しでも早く入ろうと急いで走って転倒した人が多く、階段でころんだ年寄りもあった。脳貧血や腹痛は手当所の休養室で二十分位眠ると元気になって見物に出かけた。

二十日に「人が倒れている」というのであわてて走って行くと、酔っぱらいである。「その中に酔いも覚めるわ」と帰って来ると、その近くで地図を売

っているアルバイト学生が、国辱だから手当所に収容して欲しいという。

「放っといてくれ」という酔っぱらいを担架と車椅子で運び込み、暫時休ませた後中央診療所へ送った。伊野さんは担架を使ったのははじめてと、大満悦というエピソードもあった。

隣は警備員室で、二日目には仲よくなって入場者数や各広場、パビリオンの状況などを話して貰ってたのしかった。この間にも、電気や冷房機などの点検があり、日本女医会山崎倫子理事の見廻りあり、この時カナダ館からの患者が三、四人来て英語の達者な山崎先生の応対に喜こんだり、関西医大ご出身の黛先生も見学に来られて混雑していた患者の手当をして頂き、その上おやつを頂いたり、他の広場の手当所から子供の患者についての問合せの電話がかかったり、忙しいがたのしい二日間であった。

四時から九時までは寒い寒いといいながら三村さんと方々見物したりして、大阪で、東京でまた会いましょうと若い友も出来て、役務提供の収獲は多かった。

中央診療所の日本女医会の本部の方々にもご親切にお世話頂き、厚くお礼を申し上げる。

× ×

南半球の旅あれこれ

大原一枝

二月中旬から下旬にかけてという、学年末の比較的忙しい時期にぶつかったせいもあって、今回の第十二回国際女医会の旅は、私にとって何となく気のすすまぬ旅であった。しかし、この度の会議で一九七四年の国際女医会長にえらばれたモラニ博士との口約束もあったので、準備らしい準備もしないで、兎も角も夏着を一杯つめこんだトランクをもって出発した。モラニ博士とは一九五六年の会議以来の旧友で、彼女はアメリカの成形外科医である。

そもそも今回の旅行は、私にとって三度目の海外旅行で、第一回、第二回とも在外研修員という公的な旅であったので、今回こそは気軽に団体の一員として参加したいという気持が強かった。従って日記もメモもとらなかったので、正式報告はそれぞれの先生方にお願いして、気楽な立場からのコメントを二、三述べて、責めを果したいと思う。

十四年前、スイスのビュルゲンストックでひらかれた国際女医会に単身参加した私にとっては、今回の総勢四十七人という大量参加は、全く文字通り今昔の感にたえずといったところである。

さて、メルボルンでは、総会第一日、先ず小野春生国際女医会副会長の名司会ぶりに感嘆した。その手際は私たち日本女医会員だけでなく、各国からの参加者全員の認めるところで、母国語なみのりゅうちょうな語学力に加えて、鋭敏な頭脳、デーンと坐った肝っ玉、魅力にあふれた人柄と風貌等々によるものであろう。佐野アヤ子国際連絡書記による、石津澄子さんの論文の代演が、これまた美しい英語で行なわれ、会場の感銘を呼んだことと並んで、私たちの大きな誇りであった。

タスマン氷河にて

ところがこのようにお二方の英語の立派さにひきかえて、私たち日本からの参加者の大半は英語に弱いことで苦労した。会議中外国語のラッシュを、どうせ解らぬと子守歌代りに居眠るのならともかく、少しでも多く理解しようと、四・六時中緊張して聞き耳を立てていると、数時間でヘトヘトになる。会場の世界各国の女医のうち、こんな苦業をしているのは多分我々だけだろうとさえ思った。もちろん、このような嘆きは、英語に堪能な若い世代の女医が、ドンドン参加するようになれば、近いうちに解消することであろうが……。

私の接した各国の女医たちは、旅行と同じ程度に会議を楽しんでいたようである。われわれにとっては、「旅は楽しく会議は苦し」という実情で、この点旅行プランの立て方、参加者の主目的のえらび方など、一工夫の余地があるのかも知れない。

また、各自に手渡されたプログラム（参加者名簿共で八十六頁）を一通り読んでさえ居れば、当然承知できたことであるが、会期中毎日会報が発行され、各宿舎へ朝食時刻までに届けられ、それにはその日その日の連絡の事項や、行事の案内が掲載されていたり、ホテルから会場往復のバスの時間表があったり、印刷物の無料郵送サービスや、複写のサービスをアップジョン社が行なっている等々のことを、会期の半ば頃まで知らずにいたため、様子がわからずさながら迷える羊群のごとく右往左往した。渡された印刷物をよく読みさえすればと反省したことである。結局、今回のように会期が長い場合には、旅行社の人以外に、会議に関する世話役が必要なことを痛感した。

以上、会議期間中の私の感想を卒直に述べたが、必らずしも全体の意見でなく、私見かも知れないことをお断わりしておく。

次に楽しい観光のことに移る。

「サンザン苦労する」と、いみじくも誰かがもじったメルボルンの宿舎、サザンクロスホテル滞在期間中、大部分の方々にはアリス・スプリングおよびアイヤーズロックへの二泊三日の、あるいはタスマニア島への一泊二日の旅行に出かけられ、おそらく生涯二度とは行けない遠隔の地の壮大な、あるいは美しい景観をほしいままにされた。

私自身は二月十五日（日）のヒールスビル野生動物保護区への半日旅行に参加して、童心に帰って草原にカンガルーと戯れた。また二月十八日（水）には国際女医会主催の観光バス旅行で、人口五万六千という内陸第二の市であるバララートを訪れた。往路バスを停めて、「皆さん、運がよければコアラ熊の自然棲息の様子を見ることができます」ということで、広い草原の中に一本立っていたユーカリの大木の下までゾロゾロ歩いて行き、はるかに高い樹上に数ひきのコアラ熊を望み見た時の嬉しさ。バララートではベゴニアの花の展示で世界的に有名な音楽堂のそばの公園に散在する木蔭のテーブルで、このまちの女医六人の好意による野外のランチを楽しんだのち、柳に似た木でふちどられた沼沢の水面に、黒いスワンの群々の遊泳するさまを見て、魂まで洗われる心持がした。

「こんなに沢山、黒いスワンを見るのははじめてだ。日本ではほんの二、三尾を皇居のお濠でみただけだ」と云

ったところ、「日本の皇居の黒スワンはここから行ったのです」とのこと。はしなくも皇居のお濠の黒スワンのふるさとを訪ねたことになった。

二月二十一日メルボルンをあとにニュージーランド南島に向った。この国の第一日はクライストチャーチに一泊したが、ここは英国風を最もよく残していると云われる美しい町で、文豪シェクスピアの生誕地を流れるエボン河の名を取った同名の河がくねくねと市街を横切って流れており、宿舎のクラレンドンホテルのすぐ横のこの河畔には、沢山の水鳥の群が遊んでいて、大都会で数日を過して来た私たちの旅愁を慰めてくれた。

翌朝は飛行機でニュージランドアルプスへ向い、ハーミテッジの山荘の前からマウント・クックの雪を被った山頂を雲の晴れ間に望み見、またここからバスにゆられて、タスマン氷河に向い、氷河の痕跡のある石を探したり、岩かげの小花をいつくしんだりして、大自然の懐で楽しい一時をすごした。

このように書いて行くと、次いで訪れた北島のウエリントンやオークランドの美しい風景や、見学した病院や施設、そこで働く女医や看護婦、尼僧たち、訪問した女医宅での交歓風景など、思い出は活き活きと美しく、走馬灯のように胸に浮んでとめどがない。

こわさないように大切に持って帰ったドライフラワーの小さな花束や、宴席の名札にはりつけてあった高山植物らしいあかい可愛いい小花など、いくら眺めてもあきることがない。機あらばもう一度……と、旅情のそそられる南半球の旅であった。

最後に三神団長、小野、佐野両先生をはじめ、同行の先生方に、旅行中一方ならずお世話になり、また多くのご迷惑をおかけしたことに対してお礼とお詫びを申し上げ、この拙文を終る。

感想あれこれ

平出ふさ江（北海道）

今回の国際女医会出席に際し、私達のために種々お世話下さった役員および関係者の皆さんに、心よりお礼を申し上げます。参加した一団員として国際会議には関係なく、歩いた地方の印象的な感想を、少々書きます。

◇　◇　◇

シドニー　商業的な非常に活気あふれた街。

メルボルン　一番西欧的な街。空港に降りた途端何となくカトリックの街と言う感じをうけた。厚い肉。味の深みのない料理でも、感心したのは熱いものはあくまで熱く、お皿も充分暖めて出す心遣いであった。

キャンベラ　美しい本当に美しい紙屑一つない街、家々の前庭の色とりどりの花。

ニュージランド　雲のない青い青い空、水平線が高く見える遠い海、ジャングルの梢は高く、森の中を走る観光道路の幅にしか見えない細い空、壮大な牧場。

タスマン氷河　絵に見たアルプスの峯々そのものの白い山と空との交錯、玩具のような小さな飛行機で谷を縫って我々は何万年もの昔をひそめるタスコン氷河の上を飛んだ。

アレコールワット　偉大な芸術の国。古代クメール王朝の遺跡の神秘さ。

筆者　平出氏

◇　◇　◇

先ず感心したのは、各国に多数の華僑が確かりと根を下ろしていることであった。あの根性には驚きもし、また感心もした。住んでいる家、自分達の服装、そんなものはどうでもいいようである。只働いて得た賃金を貯蓄することのみに専念するとか。それをまた彼等は社会のためとか、町のためとか、他人のためとかには殆んど使わない。完全な利己主義である。大金持ちの中には異例もあるだろうが、大体は自己保存が、彼等のモットーと思われる。他国に入り市民権を取り、自国に帰ることもなく、ゆっくり腰を据えて金もうけをする、そこに華僑の根性がうかがわれるようだ。華僑はなりふりを見てその人の資産の評価はできないと思った。まだ就学年令にも達しない子供達でさえ「旦那さん、奥さん、兄さん、姉さん、これ買って。安いよ」と外国人に夫々その国の言葉で言うことを知っている。これは大人から教えられたものであっても外人にピッタリくっつきはなれず、全くしっこくねばり、物を売ろうとする、そのしっこさはやっぱり華僑の子だなと思わざるを得ない。根っからの商人だと云う感が深い。日本だったら時に田舎の子供や大人に似たような事実があったとしても、こんなしっこさはないと思った。

◇　◇　◇

東南アジアについて感ずることは島崎藤村の夜明け前とは意味は違うけれど、外観の余りにも近代化したものと昔のままの赤茶けた薄い瓦屋根の小さな平家が同時に目に入ることだ。このアンバランスな建物が、先ず東南アジアの夜明け前のような感じを深く感じさせる。十何階建の高層ビルと、薄汚れた平屋、道路の沢山な紙屑、そこに動きまわる裸同然の人間達。そしてその人々の生気のない眼。窓から突き出されている洗濯物、実に雑然とした所だ。その人々の底辺に流れる思想面や行政面も、夜明け前であるかも知れない。然しこの混沌の中に、これから伸びようとする何か力強い意欲がよどんでいるようでもある。

四季の変りもなく、常春のような気候で、食物も自然に沢山とれるだけに最低生活は楽で、日々を働いて食べてゆかねばならぬ人間としての生活の激しさを、知らないのではなかろうか。

東南アジアも今後三十年いや五十年後の国であろう。心より彼等の自覚と発展を祈った。

◇　◇　◇

アジアの各国（日本も含めて）は、これからドンドン伸びて行く、その変貌も激しいことだろう。然しどうか昔からの良いもの（景色や建物その他）を変貌の中に充分生かすことを忘れないでほしい。いたずらに西欧化することが能ではあるまい。ことに道路、公園や各種建設会社の方々にお願いしたいと思うが、建造物を作られる時は、その国々の古いものの美しさを加えてほしい。そうでないと人間の精神面のバランスも損われてゆくと思うからだ。

本当の意味での人間と物質の共存と共栄を、望むものである。

×　×　×　×

夫々の土地の事情を本当に知るには、その土地に一年以上も滞まらなくては分からぬと思う。一日か二日逗留しただけで書くのは、全面的に正確とは勿論云えないだろう。拙文、拙想汗顔の至りであるが私見を一言述べた次第。

万国博医療対策打合わせ会報告

中川冨士

とき　昭和四十五年四月十五日
午後二時～四時三十分
ところ　万国博協会本部

一、開　会
二、主催者挨拶
三、報告事項
(1)　患者取扱状況について
大阪府猫西衛生課長より過去一か月間の事故報告あり。
(2)　傷害保険および包括賠償責任保険について会長報告、
一〇〇億円の保険をかけたので会場内（駐車場他一〇〇万坪内）の事故の賠償は可能と説明あり。
四、懇　談
(1)　各団体の連絡協調について
(2)　日常業務遂行上の各種問題点について
(3)　集団災害発生時の対策について
懇談の時間に中央診療所、東、西診療所、日本女医会から発言を求められた。　以　上

以下日本女医会が担当する応急手当所について簡単に記す。

一、応急手当所は中央診療所に処属する。
原則として一週二回薬品、衛生材料の配給を受ける。
二、勤務時間　九時～一六時
この間応急手当所を不在にする事のないように注意あり、昼食は前日申し込みの医師、看護婦の人数分だけ、給食センターから配達される。
三、外国人患者の扱いについての注意書は必ず読むこと（診療室のテーブルの上にあり）
言葉が明瞭に通じない場合は応急手当所内の電話が親子電話になっているので、通訳センターを呼び出し患者との応対を通訳者を加えて三人で同時にする事。すべて不明の点は中央診療所へ問合せる。
四、治療はすべて無料で応急手当のみという事を念頭におく。
職員は応急手当外は中央診療所で診療投薬を受ける事になっているので、一般外来患者的の扱いをしないこと。

応急手当所に常備してある薬品の一覧表は医療奉仕される会員の方に〝日本女医会万国博医療奉仕のてびき〟に同封いたします。

◆ 万国博医療救護取扱い件数一覧表

（自 45.3.15～至 45.3.29）　（45.3.29 現在）

場所／日付	中央	東	西	月	火	水	土	シンボル	エキスポ	歯科	計	入場者数	備考
15（日）	(1) 41	24	56	30	27	59	55	68	44	9	413	274,124	
16（月）	27	11	25	15	32	18	37	37	33	6	241	163,857	
17（火）	24	24	26	19	28	35	22	44	23	8	253	199,513	
18（水）	41	18	34	23	25	28	14	67	45	13	308	195,156	
19（木）	42	25	34	14	41	26	37	66	31	7	323	183,441	
20（金）	29	23	45	20	29	28	44	56	43	8	325	192,413	
21（土）	(2) 51	34	75	39	55	68	62	96	81	8	569	376,877	
22（日）	29	28	40	47	33	55	42	85	45	9	413	303,599	
23（月）	50	28	46	30	31	32	49	87	68	12	433	244,473	
24（火）	48	35	54	33	49	43	37	77	44	11	431	236,019	
25（水）	41	42	53	36	54	38	53	99	77	15	508	278,658	
26（木）	(1) 46	44	66	40	53	61	88	84	84	19	585	350,662	動く歩道事故
27（金）	61	40	95	45	64	73	60	89	107	16	650	411,046	
28（土）	59	41	85	51	52	59	67	101	108	15	638	371,139	
29（日）	58	44	84	67	59	57	69	99	80	12	629	381,587	食中毒発生
計	647	461	818	509	632	680	739	1,174	919	171	6,771	4,249,251	

（参　考）
◇ 疾　病　率……約 1,000 人に 1.6 人の割合である。
◇ 一日平均……約 451 人

（注）
1. 中央の（　）内数字は入院患者数である。
2. 中央の数字は救急患者のうち無料で取扱ったもののみをとりあげた。

◆ 取扱患者内訳一覧

（自 45.3.22～至 45.3.29）

	患者総数①	観光客② 日本人④	観光客② 外人⑤	職員従業員③ 日本人⑥	職員従業員③ 外人⑦	観客罹病率 ②÷①	職員罹病率 ③÷①	日本人罹病率 ④+⑥÷①	外人罹病率 ⑤+⑦÷①	備考
						%	%	%	%	
22（日）	413	292	2	115	4	71.2	28.8	98.5	1.5	
23（月）	433	290	8	115	20	68.8	31.2	93.5	6.5	
24（火）	431	308	3	111	9	72.2	27.8	97.2	2.8	
25（水）	508	362	13	121	12	73.8	26.2	95.1	4.9	
26（木）	585	458	12	109	6	80.3	19.7	96.9	3.1	動く歩道事故
27（金）	650	497	10	124	19	78.0	22.0	95.5	4.5	
28（土）	632	502	13	102	15	81.5	18.5	95.6	4.4	
29（日）	630	469	5	138	18	75.2	24.8	96.3	3.7	食中毒発生
計	4,282	3,178	66	935	103	75.8	24.2	96.1	3.9	

◆ 疾病別患者内訳

（主なるもののみ）　<45 3.15～45.3.29>

	擦過傷	感冒	胃腸病	急性腹痛	捻挫骨折	頭痛	歯科	打撲	耳・咽	貧血	備考
患者数	1,086	1,080	792	609	328	322	227	224	211	207	
比率	16.0%	16.0%	11.7%	8.8%	4.9%	4.8%	3.4%	3.1%	3.1%	3.1%	

（注）　比率は患者総数 6,771 に対するもので，高順位のものより10項目のみをとりあげた。

万博寄付申込者

（昭和四十四年十一月一日～昭和四十五年四月三十一日）

荒木一雄　吉浜敦　丸茂畠子
秋田喜美　青柳雪子　岩田かよ子
吉岡フキ　小野寺トモ子　山上美枝子
川村糸子　柴田敏子　上田たね
山崎英子　高田ヨシ　境登喜子
三井雅子　今西隆　渡辺智恵
渡辺エハ　浜崎マス　池沢英子
笠原房子　清水有子　高橋寿子
渡辺歌子　竹内八千子　菅沼志津子
近藤寿子　早川慶子　小松延江
庄司恭子　星野茂子　吉田光代
良田圭子　今野信子　伊藤サワ
土屋臣子　佐藤イクヨ　今西英恵
中条みよ　樺島政尾　阿部十七
伊藤公子　伊藤サワ　原田住江
横田登喜　北野モモ子　一戸茂子
安部マサ　牧野操子　大東京火災三輪支店
富士銀行鶯谷支店　三共KK　三菱銀行台東支店
シャーロット女史　エーザイKK
田辺製薬科研薬化工業　富士銀行中野支店
日立レントゲンKK　日本ルセルKK　台東ファイザーKK
富士銀行新宿支店　富士銀行上野支店
千代田レントゲンKK　東芝放射線KK
島津製作所　安田信託銀行　日興証券
野村証券　山一証券　大和証券
中外製薬　千住福神KK　雪印乳業
クラヤ薬品　三和医料器械店　ヨシダ電化
東邦薬品　石田呉服店　井出病院
第一製薬　日本化薬　武田薬品工業

万国博宿舎利用ご希望の方は至急お申出下さい。

利用できる期間は左記の通りです。

六月二十五日～三十日
七月一日～六日
七月十五日～三十日
八月二十四日～三十一日
九月一日～六日

ただし申込みは先着順に受付け、収容人員超過の場合はおことわりします。

編集後記

国際女医会総会への参加と万国博医療活動などまことに国際色もゆたかに、一九七〇年代に雄飛活躍する日本女医のエポックメーキングとしてふさわしい内容である。

激変きわまりない今日の国際状勢のなかで、私たちは何としても平和を守ってゆきたい。人と人との心のふれあいと文化の交流に、女医としての役割りはまことに大きい。

一九七六年には日本で国際女医会を開催したいものである。七二年のパリー会議、七四年のリオ会議には、この大勢の会員の参加を期待する。また荒川あや先生の第一等にならって、ご夫妻組も多数後続してほしい。

万博の救急役務奉仕、それは他人からほめられるためでもなく、会の名誉のためでもない。女医の底力を世の中のためにつくす手段にすぎない。その純粋な愛情こそ平和をもたらす鍵となる。ご協力を乞う。（湯本アサ）

昭和四十五年五月十日印刷
昭和四十五年五月十五日発行
編集人　森千鶴
発行人　日本女医会
発行所　東京都新宿区市ケ谷河田町19
社団法人　日本女医会
TEL（341）〇九六八
印刷所　東京都港区白金五-四-一
興栄美術印刷株式会社

題字　吉岡弥生